

ティム・バートのコブス ブライド

2005(平成17)年10月30日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・製作＝ティム・バートン／監督＝マイク・ジョンソン／声の出演＝ジョニー・デップ／ヘレナ・ボナム＝カーター／ポール・ホワイトハウス／トレイシー・ウーマン／エミリー・ワトソン／ジョアナ・ラムリー／アルバート・フィニー／リチャード・E・グラント／クリストファー・リー／ジェイン・ホロックス／エン・ラティン／マイケル・ガフ／ダニー・エルフマン／ディーブ・ロイ (ワーナー・ブラザーズ映画配給／2005年アメリカ映画／77分)

第2章

映画は楽しめるのが一番！

……ティム・バートン監督のストップモーション・アニメにジョニー・デップが声の出演！ 結婚式のリハーサルで失敗した挙げ句、指輪をはめたのは、何と土の中に眠るコブス ブライド (死体の花嫁)。当然そんな三角関係は大問題だが、以降展開される生者・死者入り乱れての三角関係、四角関係(ダブル不倫?)は、夢いっぱいの人間愛に溢れたもの。主人公の決断も偉いが、コブス ブライドの選択も立派で、そこにバートン作品の良さが凝縮されている。婚姻の要件は？ 生者と死者の婚姻は？ 婚姻の終了は？ 重婚の可否は？ など、面白い法律問題に絡めた坂和流評論の面白さをタツプリと……。

🎬 ティム・バートンとジョニー・デップ

ティム・バートンという1958年生まれのかなり変わった(?)映画監督は、つい最近日本でも大ヒットした『チャーリーとチョコレート工場』(05年)と並行して、この『ティム・バートンのコブス ブライド』を監督・製作していた。そのうえその主役は両方ともジョニー・デップで、この2人の「天才」は大いに気が合うらしい。

そこらの話はパンフレットはもとより、新聞紙上でもいっぱい書かれているので、ここでは省略。

ストップモーション・アニメとは？

ティム・バートンはストップモーション・アニメが大好きで、短編デビュー作の『ヴィンセント』(82年)もそうだったとのこと。私が観たのは『ナイトメアー・ビフォア・クリスマス』(93年)だったが、これはアニメといっても宮崎アニメやディズニーアニメとは全く異質のもので、ティム・バートン監督独自の世界にビックリ。また、その手法や手づくりの大変さなどについても、パンフレットに詳しいのでここでは一切省略し、全く別の視点から私の評論を書いてみたい。

登場人物の紹介その1 新郎新婦とご両家は？

この映画は19世紀のヨーロッパ(イギリス?)が舞台だが、その当時の時代状況を前提としたうえで、登場人物の像をある程度、理解しておく必要がある。まず大前提は、当時のイギリスは貴族社会・階級社会であること。『オリバー・ツイスト』(05年)で描かれていたように、産業革命の発生とその進展によって資本家階級が生まれ、労働者階級と分離していったが、それ以前の貴族 VS 平民という階級制度も当然強く残っていた。そのため、魚の缶詰業で富を築いたものの成り上がり者にすぎないウィリアム(ポール・ホワイトハウス)とネル(トレイシー・ウーマン)のバン・ドート家は息子のビクター(ジョニー・デップ)を貴族の娘と結婚させることによって、貴族階級の仲間入りを希望していた。

逆に由緒正しい貴族ながら、金庫の中には1ペニーも残っていないモーデリン(ジョアナ・ラムリー)とフィニス(アルバート・フィニー)のエバーグロット家は、プライドだけではメシが食えないため、仕方なく娘のビクトリア(エミリー・ワトソン)を金持ちと結婚させ、昔の栄華の復活を願っていた。そんな両家の思惑で実現したのが、ビクターとビクトリアの結婚というわけだ。したがって、ここではビクターとビクトリアの個人としての結婚の意思の有無は全く無関係……。そしてこれが法律上の論点その1だ。

登場人物の紹介その2 牧師は？

19世紀のイギリスでは、ビクターとビクトリアの結婚は、教会において牧師

(神父?)が、その成立を宣言することによって成立する……? この映画の上ではそのようにされているから、それ以上の追及は不要とするがそれってホント……? これが法律上の論点その2だ。

こんな念入りなりハーサルってホント?

結婚式のリハーサルというものをホントにやらせるのかどうか、またそれがこの映画のように厳格なものかどうか、さらに誓いの言葉をロクにしゃべれなければ牧師がキレてしまうなどということがありうる話なのかどうかは知らないが、問題のすべての根源は、ビクターが内気なため(?)リハーサルで誓いの言葉をうまく言えず、ハマばかりしてしまったこと。

ここで第3の法律問題は、牧師が結婚を宣言する文言には、2人の結婚が有効なのは「死が2人を分かつまで」とあることに照らすと、一方が死人になれば結婚は終わってしまうのかどうか、あるいは生者と死者の結婚は成立するのか否かということ……?

登場人物の紹介その3 コープス ブライドの登場

キレてしまった牧師が、「ちゃんとできるようになるまで結婚式を延期する」と宣言してしまっただから大変。1人しょげ返って森の中を歩きながらセリフを練習していたビクターは、何度か失敗をくり返していたが、ついにある時、完璧に。そして右手にもった指輪を地面から突き出した細い小枝に。そしてそこにムクムクと土の中から現れてきたのが、コープス ブライド(ヘレナ・ボナム＝カーター)。ビクターが指輪を置いたのは、地上に少し出ていたコープス ブライドの指だったのだ。そして何十年間も男からの求婚を待っていた花嫁姿のコープス ブライドは地上に登場するや、ビクターに対して「お受けします」ときたから、ビクターはビックリ仰天。何とか逃げ出そうとしたが、そりゃ無理なこと。ついにビクターはコープス ブライドとともにガイ骨だらけの死者が住んでいる死者の世界の中へ。

こりゃまるで私たちの学生時代に一世を風靡したフォーク・クルセダーズの「オラは、死んじまっただー……」の世界……?

登場人物の紹介その4 三角関係(?)からダブル不倫(?)へ

結婚のリハーサルの席に突然現れたのは謎の紳士(?)パーキス・ビターン(リチャード・E・グラント)。彼はエバークロット家の遠い親戚で本番とリハーサルをまちがえてやってきたと弁明していたが、何となく曰く因縁がありそう。新郎新婦を含めた両家の人物像はミュージカル仕立てとされている物語の展開の中ですぐに理解できるが、このパーキスだけはサッパリわからない。そしてネタバレにならない程度でいえば、このパーキスがビクターとビクトリアそしてコープス ブライドとの三角関係から、ヘタすると、パーキスを交えたダブル不倫になりかねないような(?)ヤバくて重要な役割を演ずることに……?

これも重要な法律問題だが、こんな美しいドラマに免じて(?)そんなドロドロした法律問題は省略し、第4の法律問題として、重婚の可否だけを指摘しておこう。

法律問題その1 婚姻の要件は?

日本国憲法は、「婚姻は両性の合意のみに基いて成立し……」と定めている。つまり結婚は、両性の個人の意思にもとづくものというのが、法律以前の憲法上の大原則だというわけだ。したがってこの映画のように、そして昔の日本の「家制度」下における結婚のように、両家が結婚するのではないことは明らか。

そしてバン・ドート家やエバークロット家、とりわけビクトリアの意思を完全に無視した母親フィニスのような言い分は全く通用せず、憲法違反であることは明らか!

法律問題その2 要式行為とは?

婚姻の成立は講学上いわゆる「要式行為」とされているため、届出が必要。民法739条1項は「婚姻は戸籍法の定めるところにより届け出ることによって、その効力を生ずる」と定めている。したがって、いくら牧師が教会における結婚式の席上で2人の結婚を宣言しても、それだけで効力を生じるものでないことは明らか……。

法律問題その3 姻族関係の終了は？

牧師が聖書を片手に宣言するのは、「死が2人を分かつまで」「結婚は有効」だということ。ところがこれについても、民法728条2項は「夫婦の一方が死亡した場合において、生存配偶者が姻族関係を終了させる意思を表示したとき、姻族関係は終了する」と定めている。

したがって、この牧師が宣言するように、死が2人を分かつことによって生物学的な婚姻は終了するとしても、法律的な姻族関係は当然には終了しないというわけだ。さらに現実の世界を律する法律においては、いうまでもなく、生者と死者の結婚などありえないことは当然！

法律問題その4 重婚の禁止とは？

民法の親族法の勉強では、すぐに重婚の禁止を学ぶ。すなわち民法732条は、「配偶者のある者は、重ねて婚姻をすることができない」と定めているが、これは万国共通の原理（もっとも、第2夫人、第3夫人オーケーのイスラム教では……？）。

映画では、ビクターは結婚式のリハーサルをただけで牧師の結婚成立宣言も受けていないから、当然ビクトリアとの結婚は不成立。したがってビクターがコープス ブライドに対して結婚の申込みをして（民法上これは典型的な「心裡留保」のケースであり、民法93条2項によって無効……？）指輪をその指にはめ、花嫁がそれを「お受けします」と答えれば、その時点でビクターとコープス ブライドとの結婚が成立したと考える余地は十分にある……？ するとコープス ブライドのもとを逃げ出してきたビクターがビクトリアと結婚できるかどうか、すなわちそれは法律上禁止された重婚となるのかどうか微妙……？

他方、曲者のパークスは、ビクターが行方不明になった後、パークスが意外にも独身の貴族だと知ったビクトリアの両親に取り入って、ビクトリアと結婚式を挙げることになるが、その結婚が成立してしまうと、ビクトリアはいくらビクターがコープス ブライドのもとから逃げてきたとしても再びビクターと結婚することは不可能となるはず……。

全てを解決する魔法の解決策は？

このようにビクターとビクトリアの結婚式のリハーサルにおけるビクターの失敗に始まった結婚騒動は、3つ巴、4つ巴の混乱模様となってくるが、ここでの魔法の解決策は、有能な弁護士であれば当然想定できるもの。そして現実にはこの映画では、それが提案されることに……。それはすなわち、生者であるビクターが死者になること。つまりビクターが死んでしまったら、すべてがうまくいくわけだ。しかし、コープス ブライドとの結婚のためにあなたはそんな選択ができる……？

短いことはいいことだ！

この映画は今どき珍しく77分と非常に短い。これはオープニングからすぐにミュージカル仕立てでバン・ドート家とエバークロット家の紹介に入り、その後もテンポよく物語が進行していくため。ワケのわからないシーンをつないで観客にいろいろと考えさせていく映画が多い昨今、このようなシンプルな展開はかえって非常に新鮮。

まずは生者の世界におけるドロドロとした計算高い人間模様とその中でピュアに悩むビクターとビクトリアの姿がわかりやすく描かれた後、次に何ともバカ陽気な死者の世界が……。死者の世界がこんなに楽しいのなら、ちょっとのぞいてみたくなるのは私だけ……。そして、そんな生者と死者の世界をやむをえず往き来することになったビクターがビクトリアをあきらめ、コープス ブライドとの結婚を決意したのはあくまで本気。さらにそれは、自分の生命を犠牲にしなくてはならないと理解したうえでの決断！

わずか77分という時間の中で、これほど重いビクターの決断をなるほどと観客に理解させたうえ、その後はティム・バートン監督が狙ったとおりの落ち着くべき結論に……。何ともお見事な手法と感心するばかりだ。

ちなみに『キネマ旬報』11月上旬号における「専門家」の採点は、4人中3人が4点満点で、1人が3点というまれにみる高得点、やはりみんなこんな映画が大好きなのだ……。

2005(平成17)年10月31日記